平成 21 年 7 月号　№ 393

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
なかま編集係
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話 (043) 485-1801

2 ページ　知的障がいのある人の高校進学　中邨淑子
3 ページ　義父のこと　酒井綾乃
男の家事　林　久子
コローと等伯　村田長保

世界自然遺産
白神山地を歩いて

伊藤　由紀子

昨年七月、念願の白神山地を歩いてきました。

白神山地は一九九三年十二月に世界自然遺産として屋久島と共に、日本で初めて登録されました。一九七〇年代、この森に林道を開通してブナを伐採しようという計画が持ち上がり、一九八二年、建設工事が始まりました。これに対し反対運動が起こり、ブナの原生林を白神山地と命名して保護したという経緯を経てのことでした。

過去に一度、天候不順のため「暗門の滝」はおろか「ブナの原生林」にさえ入れなくて、体験ゾーンの中だけを、ネイチャーガイドと共に歩いたという苦い経験がありました。今度こそという思いと「十二湖めぐり」への期待とで、胸がはずむ思いのツアー参加でした。

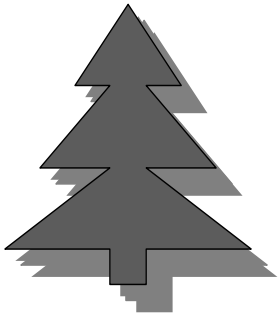
一日目は青森空港を振り出しに、津軽富士見湖にかかる木造の「鶴の舞橋」、「くろくまの滝」、「千畳敷」を散策。

二日目が、メインコース「十二湖めぐり」でした。約二九〇年前の地震で、谷がせき止められて出来たという山上湖には大小三十三の湖があり、崩山（くずれさん）山頂から見ると十二湖のみが望めるので、その名がついたそうです。中でも太陽の光の角度によって湖の色が微妙に変わるという「青池（あおいけ）」が、その日のハイライトでした。当日の朝は曇天でしたが、バスを降りて歩きだした頃から、雲が少しずつ動き始めました。そして青池に着いた時は薄日が差して、神秘のベールを脱ぎ捨てるかのように、深い青緑色の湖面が姿を現し、思わずため息がもれました。

三日目、ブナの大木「マザーツリー」に会いました。樹齢四〇〇年という樹木の命に、私たちには見ることのできない過去から現在へ、そして未来へとつながる架け橋のような思いがしました。その後、ネイチャーガイドから、ブナの生態系や白神の植物の解説を聞きながら、新緑のブナの原生林を歩きました。

奥深い白神山中の樹木から、絶え間ない命の息吹と、遠い祖先からのメッセージをもらったような散策で、積年の夢を果たした思いでした。

（編集委員）



知的障がいのある人の高校進学

知的障がいのある人が県立の普通高校に進学し、障がいのない人と同じように高校生活を送り卒業していることを少し紹介させていただきたいと思います。障がいのある生徒の高校進学に関して千葉県はトップクラスです。

二十年前から県の教育委員会と障がいのある生徒の高校進学に関して地道な話し合いを重ねているのが「千葉『障害児・者』の高校進学を実現させる会」です。一九八九年の会発足以降八十三名が入学し、今年は二十四名が県内の普通高校に在籍しています。障がいのある人のみならずこの会の一番の願いは、高校進学を希望するすべての生徒の後期中等教育を保障してほしいことです。

次男も知的障がいがあり、テストをすれば点数はとれませんでしたが、入試要項にのっとり特別配慮申請書を提出し、介助者付き別室受験をして合格しました。進級に関してはそれぞれの高校が様々な取り組みをしています。次男の高校も本人の頑張りを評価する工夫をしてくれ、同級生と一緒に進級し卒業しました。

同年代の仲間と過ごした高校生活で得た経験は本人にとってとても大きな自信となっています。学んだことの多さはむしろ卒業後に実感としてたくさんあります。障がいのあるなしで小さい時から分けてしまうと、障がいのある側にもない側にも心にバリアーを作ってしまいます。心のバリアーは最大のバリアーです。

高校という場にも障がいのある生徒が日常的に在籍することが社会の豊かさの一助になると私は信じています。

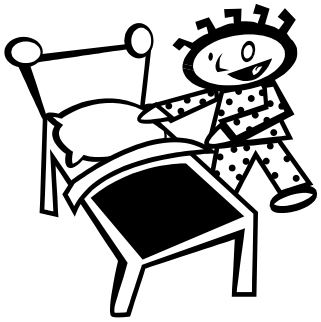
（大蛇町　中邨淑子）

男の家事

忙しい年末の疲れがでたのか、松の内もすぎた夜、お酒を飲まない私が、めずらしく甘酒を作って飲んで寝たのが、どこか具合が悪かったのか、その夜中下痢と吐気で一晩中苦しみ、翌朝は頭もあがらない程でした。

今まで風邪で二、三日ねても、食事の仕度ぐらいは出来たが、今回はお茶を飲むのが、やっとだった。夫婦二人、そんな時男は何の役にも立たない。寝ていても、おなかはすくし、何か食べたいと思っても、普段何もした事のない夫に言っても無駄なので、何とか昨夜の残り物で、わびしい朝食をした。私が起き上がらないのを知った夫は、覚悟を決めたらしく、昼食は菓子パンで済ませたが、いよいよ夕食の仕度。私は床の中からいろいろと指図をして、やっとご飯が炊けた。冷蔵庫の中の物を適当に選んで夕食らしきものが出来上がった。食器棚の中をがちゃがちゃ、お茶碗を探しているらしい。「久さんのお茶碗これ？」と二つも三つも見せにくるけれど、違うものばかり。数十年一緒に暮らしているのに、妻の茶碗もわからないのかと、私は涙があふれてどっと枕に顔をおしあててしまった。慣れない男の家事をみたからか。

（稲荷台　林　久子）



義父（ちち）のこと

同居の義父が、新聞の切り抜きを嫁である私に渡すのが、最近の日課になっている。「読んでおきます」と行儀よく返事し、冷蔵庫に貼っておく。ここまでは、立派な嫁！ところが、義父は奇襲攻撃をかけるように、切り抜きの感想を求めてくることがある。「まずい」と心の中で思っても、時すでに遅し。私は、何か用事ができたフリをして、逃げ切るのが常だ。フー。

さて、今朝も義父が新聞の切り抜きを持ってきた。葬式費用の全国平均は二三一万円だという。霊きゅう車や祭壇など葬儀会社への支払いが一四二万円で六割以上を占める。それ以外、お布施とよばれる読経代や戒名などの寺院関係費が五五万円、通夜や告別式の後の飲食接待費が四〇万円。

たまたま夫と自分たちの葬儀話をしていたから、義父の切り抜きは、話を深めるグッドタイミング。義父も加わり、三人で自分たちの葬儀の話になった。葬儀会社のCMに「葬式ぐらい自分の好きにやらせろ」みたいなキャッチコピーがあったが、自分たちの葬式計画を議論するノー天気な一家だ。

義父は、切り抜きの記事にこだわり「式場使用料が二三万円は高いな。おまえらの通っている教会でやってもらったらタダかな」と、死んだ後の節約を思案している。夫が「パチンコに消えている年金を節約したら」と提案すると、義父はこう答えた。「俺が寝たきりになったら、カネを使えなくなって、たくさんたまるから心配するな」。義父が一枚も二枚も上手だ。

（山王　酒井綾乃）

コローと等伯

上野の「コロー展」で《ボロメ島の浴女たち》を見て、長谷川等伯の《枯木猿猴図（こぼくえんこうず）》を連想したのは私だけであろうか。

図録の解説者ヴァンサン・ポマレッド氏は木の蔓にぶら下がる浴女を「いかにも奇妙な演出であるが、《果樹園》のなかの木登りをする少年など、以前の作品に描かれたモチーフを翻案したものなのである」とサラリと躱（かわ）している。

併しこれだけでは「奇妙な演出」の唐突さ、珍無類さは説明しきれていないのではないか。コローははっきりとした先例を見たから、この様なモチーフを美しいと感じ、浴女に応用したのではないか。その先例が外ならぬ等伯だったのであろう。ヨーロッパ人にとって「いかにも奇妙な演出」と映る浴女のポーズを木登り少年から翻案、創り出すとは考えにくい。コローは矢張りジャポニズムの洗礼を受け、手本が猿とはいえ珍しいポーズを自作に組み入れたと考えるのが妥当ではないだろうか。

パリ郊外ヴィル・ダヴレーを舞台とした「シベールの日曜日」という映画の場合、その水墨画の様な背景は等伯の《松林図》であると監督S・ブールギニョンは明言している。この事実からも、ヴィル・ダヴレーの画家といわれたコローと等伯を結びつけても、強（あなが）ち牽強附会ではないと思う。

（新臼井田　村田長保）

７月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650 字（13 字×50 行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館　TEL０４３－４８５－１８０１

〒２８５－００２５　佐倉市鏑木町１９８－３

さくら道

突然の雨に見舞われた。不安定な天気を予測し、かさを持って出かけたのが幸いした。気がつくと、二十ｍほど先を濡れながら歩いているご婦人がいる。追いついてしまった私は声をかけた。「よろしかったらお入りになりませんか」「どうも」。ところがそのご婦人、かさに入るやいなや携帯電話を取り出し、誰かとの会話を始めた。かけ直すことを約し電話を切るのかと思いきや、私の耳元で話は続く。聞こえてしまうんだけどなあ。雨の中に放って遠ざかっては悪いしなあ。私の思案をよそに話は終わりそうにない。◆大きなマンションの前まで来たとき、携帯を耳に当てたご婦人が私の横腹をつつく。ここでお別れだと目とジェスチャーが言っている。「ごめんください」と私。あわてて「どうも」とご婦人。その間十二、三分。◆お節介だったかも知れない自分に腹を立てたり、こんな人もいるんだと自分に言い聞かせたり。ああ、世の中分からない。

（松山洋子）

あとがき

中邨様。近親者に知的障がい者とこの人達の教育の立場の人と両者がいて、この関係の話題は身近にあったのに、「障がい」の表記についての変更を知りませんでした。恥ずかしいと思いました。

林様。我が夫は自戒をこめて読みましたという。世の男性軍に一石を投じるかしら？

酒井様。能天気な一家だなんてとんでもない。理想的な同居家族に拍手を送ります。

村田様。残念ながら絵の方が掲載出来ませんので興味のある方はコローの絵を御覧下さい。私事ですが五十年以上も前に、お盆で母の実家に集まった従兄達と川遊びをした事を思い出しました。年長の従兄や地元の子供達が木にぶら下がったポーズはこの絵そっくり。歓声が聞こえてくる様だと観賞しましたが、博識の方は違った観点がお有りなのだと妙に感心しました。

（坪井栄子）